この研究は「美術」概念と、それにかかわる分類のアップデイトを目指しており、この結果「美術」の専門語としての位置を覆すような根本的な再編をも予期している。例えば、現在の日本では、しばしば「美術」に代わって「アート」が用いられているように。〇美術品の分類はその収集とともに、古今東西において必要とされてきた。美術品の分類は、これまで――たとえば「絵画」の下位に「日本画」と「洋画」が配置されるような――体系性をもつものであり、美術史も、おおむね体系的分類にしたがって叙述されてきた。しかし、今日のデジタル技術を用いた検索は、かつてのような体系性を必ずしも要さないし、また、検索者各人の体系性が並び立つような事態も想定される。このため、各種の分類が互いに正当性を主張する「分類闘争」（P・ブルデュー）が頻発する状況の到来も予想される。このような分類の変化は、とうぜん分類観の変化を生みだし、アロー図式、セミラティクスのような新たな分類の在り方が注目されはじめている。〇博物館学も美術史と同じく体系的分類を基礎としているが、新たに「美術」の名のもとにアヴァンギャルド、オルタネイトが次々に台頭することによって、従来の体系によっては「美術」の現状を捉えきれなくなっている。〇こうした状況を踏まえて、このシンポジウムは、「美術」諸ジャンルの分類と、「美術」というジャンルを問題化し、今日的視点から、そのありうべき姿をさぐることを、第一の目的としている。〇「美術」という日本語は翻訳を介して19世紀末に造語された。それは16世紀以降のヨーロッパ文明の東漸の成果であり、西洋は政治、経済の世界制覇に基づいて分類闘争でも勝利したのであった。しかし、「地方固有の知」（C・ギアーツ）による分類が消滅したわけではなく、造型の現場に生きる者たちは両者の生み出すモアレのなかで創作にいそしんできた。植民地では、解放によって国民国家形成が進められたので、この創造の桎梏は解放後に顕在化した。いわゆるポストコロニアル状況である。〇「地方固有の知」は、例えば日本における「日本美術の特質」（矢代幸雄）といった発想から主張されたように、本質論的な固有性に由来するものではなく、東アジア文化圏の交流や海のシルクロードによるインド、アフリカそして西欧との交流のなかから形づくられたのであり、他の地域でも同様であったに違いない。異なる言語の間の交流は単に語の置き換えにとどまらず、文化自体の翻訳受容を必要とする。すなわち、語の背後にある語彙の構造もしくはそれを成り立たせる分類のスタイルの翻訳である。語彙という体系的（系統的）分類を成り立たせる概念と概念の関係づけの在り方の相互理解が必要なのだ。〇コンピュータ利用は限りなく分類体系を相対化してしまったが、検索が語を用いる限り、その背後の語彙と語彙を成り立たせる分類のスタイルを無視することはできない。このような観点に立ったとき、美術における分類はどのような変貌を遂げるであろうか。

日本は19世紀後半に西洋から美術を受容したが、概念やジャンル名をかりつつ実態を変容させてきた。
これには日本に固有な歴史的背景に基づくのだが、美術史研究ではこの実態解明が進んでおり、本シンポジウムはこれらの成果やポストコロニアル状況以降の世界の実勢に照らして、その語彙や分類など包括的に美術概念を再構築（アップデイト）しようとするものである。
なお、本シンポジウムの後半は12月6・7日に金沢で開催の予定である。

日本における「美術」概念の再構築（アップデイト）

「美術」にかかわる分類の検討
―漢字文化圏を中心に

15世紀以降のヨーロッパ人による「地理上の発見（Age of Discovery）」（大航海時代）に発するグローバリゼーション状況のもとで、
漢字文化を共有する東アジア地域に惹起された分類闘争の経緯を歴史的観点から検証する。
これにあたっては、日本を主たるフィールドとしながら、
アジアの他地域での研究成果や実践との比較、検証を行う。
さらにそれらの経緯をふまえて、美術においてグローバルとローカルが確執しつつ融合する現在に立ち至ってきている現況までを検討する。
このため、美術館における古美術系収蔵品の分類やアジアにおける新たな美術史像創出への模索までを視野に収め、
「地方固有の知（local knowledge）」と近代知との接合、闘争の根幹と進展に焦点をあてる。

「美術」の脱植民地化
―グローバル化の中で

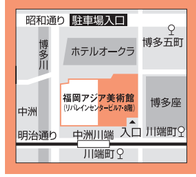
植民地支配から、第二次世界大戦後のポストコロニアル状況を経て、冷戦体制崩壊後の新たなグローバリゼーション状況に至る分類闘争の経緯を、アジア諸地域からの視点で捉えかえす。
ここでは、それらを「大地の魔術師」展などヨーロッパ美術界による新たな視点の提起から、それらに対する異論を経て、福岡、シンガポール、光州、ソウルなどで実際にアジア美術界が提起しようとしてきた近年の試みの意義と意味が提起されるので、このテーマをより具体的実践的な課題として検証し、議論することができる。
ここからこそ、アジア地域の我々にとって、もっとも切実で根底的な「美術」が見え始めるに違いない。

2014年11月8日（土）、9日（日）
時間：午前10時15分―午後5時30分
会場：福岡アジア美術館あじびホール

●……11月8日（土）
山崎 剛（金沢美術工芸大学・教授）
鈴木廣之（東京学芸大学・教授）
林 育淳（台北市立美術館・学芸員）
堀川理沙（シンガポール国立美術館・学芸員）
佐藤道信（東京藝術大学・教授）

●……11月9日（日）
後小路雅弘（九州大学・教授）
吉田憲司（国立民族学博物館・教授）
S・H・スタファ（シンガポール国立美術館・学芸員）
金 仁恵（韓国国立近現代美術館・学芸員）
岡田裕成（大阪大学・准教授）

主催：科研共同研究「日本における「美術」概念の再構築」
共催：福岡アジア美術館
後援：美術史学会、明治美術学会
問合せ先：金沢美術工芸大学科研事務局
tel.076-262-3653　e-mail:kaken@kanazawa-bidai.ac.jp

事前申し込み不要
入場無料

福岡アジア美術館
福岡市博多区下川端3-1リバレインセンタービル7・8階
tel.092-263-1100　fax.092-263-1105